

## 「そうじ」について ④

前回に続いて、「そうじ」について見ていきたい。十三号では21からの一連の歌のなかに「そふぢ」という語が登場するが、これまでの用例とは違い、人間の心だけではなく、神の心に「ほこり」が積もっており、そうじするのが難しいことが述べられている(21・22)。その際、そうした親神の心を晴らすために「つとめ」に取り掛かるように促され、人間の真心さえ神が受け取ったならどんな「ほこり」も掃除すると約束されて(23)、世界中の人間の「心のそうじ」がなされたなら、皆の心も勇んできて、陽気尽くめの世の中におのずとなくなっていくと詠われている(24・25)。

にちへに神のむねにわたんへと  
ほこりいゝばいつもりあれども (十三号 21)  
このほこりそふぢするのむつかしい  
つとめなりともかゝりたるなら (十三号 22)  
心さいしんぢつ神がうけとれば  
どんなほこりもそふぢするなり (十三号 23)  
いちれつむねのうささいすきやかに  
そふぢしたてた事であるなら (十三号 24)  
それからわせかいぢううはきがいきむ  
よふぎづくめにひとりなるぞや (十三号 25)

このように「そうじ」という語はここでは神の性質を示す上で使用されているが、こうした用例にふれるとき、『改訂正文遺韻』に「台所へ出ると埃がつく」という題名で記された教祖の次のような逸話が思い起こされる。それによると、ある人が教祖に「あなた様には、埃はございますまいね」と尋ねたそうで、それに対して教祖は「自分もこうして別間に隔てていれば、埃はつかないが、台所へ出ると埃がつく」と仰せられたそうである。同様の話は高井猶吉の『教祖より聞きし話』にもあり、教祖が台所へ行こうとなされると、親神が教祖の耳に「行くのやない」という言葉を聞かせて止められたそうで、その理由として、教祖が台所を見れば「月日のやしる」に「ほこり」がたまるとのことだそうである。これらの逸話に示される「教祖のほこり」と「おふでさき」における「神のほこり」の用例とは、親神と教祖の立場は違うから厳密には一致していないと考えられるが、しかし、「心」の性質に関しては神人の区別なく「ほこり」や「そうじ」といった言葉で示されるような様態が示されているともいえよう。ただし実践的には、先の逸話を参照すると、神人を区別するところに、神人の「ほこり」は「そうじ」されるとも考えられる。

次の十四号では、72からの一連の歌に「そうじ」の主題が展開されている。すなわち、親神はどんな者にでも真剣に「心のそうじ」に取り掛かるが(72)、身の上の痛みや事柄の上での悩みなどどのようなことが起きても、それはいうなれば親からの意見であり、決して心配することはないと詠われて(73・74)、そうした意見をするのも、言葉で言ったところで人間の方に聞き分けがないので、親神がそれぞれの身の内に入り込んでその者の心遣いをその通りに現していくのであると述べられている(75・76)。つまり、どのような辛く「切ない事」があっても、それはたんなる「病」ではなく、「親の残念」の現れで

あると説いて(77)、親神にとっては皆我が子であることが告げられている(78)。

このさきハどんなものでもしんちつに  
むねのそふぢをみなしてかゝる (十四号 72)  
このそふぢどふしてするとをもうかな  
とんないけんをするやしれんで (十四号 73)  
とのよふな事がありてもあんちなよ  
なにかよろすわをやのいけんや (十四号 74)  
くちさきでなんぼしんぢつゆうたとて  
きゝわけがないをやのさんねん (十四号 75)  
それゆへにをやがたいない入こんで  
とんな事をばするやしれんで (十四号 76)  
とのよふなせつない事がありてもな  
やまいでわなをやのさねんや (十四号 77)  
このはなしどこの事ともゆハんでな  
をやのたあにわみなわがこやで (十四号 78)

この十四号では、「心のそうじ」を促す「おふでさき」の語気が強いと感じられる。とりわけ、「言葉でどれほど真実を尽くしても聞き分けがない」(75)のために、人間にとって「切ない事」(77)が起きてくるという箇所は、実際に悩み苦しむ者にとって切実な言葉として迫ってこよう。そして、そうした一連の出来事の根底には「をや」の思いが込められており(75)、「この話」そのものが、神にとって人間が「我が子」であるという根源的な関係性を基盤にした話であることが示されている。

続く十五号では、19からの一連の歌に「そうじ」のテーマが見られて、今までは人の心の真実を知った者はないが(19)、今日はその胸の内を確かに現すから(20)、それさえ確かに現したなら、「心のそうじ」がおのずと出来る(21)と詠われている。

いまゝでわ人の心のしんちつを  
しりたるものハさらになけれど (十五号 19)  
さあげふハどんなものでもしんちつ  
むねのうちをばたしかあらハす (十五号 20)  
これさいかみなあらハした事ならば  
むねのそふぢがひとりだけで (十五号 21)

また、47にも「そふぢ」という語が見られる。まず、今までと道がころりと変わるから皆の者は心を定めよと促された上で(46)、この道というのは「うち」も「せかい」も隔てなく、全ての者の「心のそうじ」であると詠われている(47)。それから、親神は今日まで正味な真実を言ったことはない(48)、今日という今日はそれを伝えるから承知してほしいと告げられている(49)。

いまゝでとみちがころりとかハるでな  
みな一れつわ心さためよ (十五号 46)  
このみちハうちもせかいもへたてない  
せかいちううのむねのそふぢや (十五号 47)  
このよふをはじめてからにけふまでわ  
ほんしんぢつをゆうた事なし (十五号 48)  
けふの日ハほんしんちつをゆいかける  
とふぞしいかりしよちしてくれ (十五号 49)